

第12回

「中世多摩の信仰と寺社」

平成20年（2008）

近年出土した寺社の瓦やお寺に残る仏像・経本の出版背景などから、中世多摩の瓦の工人の
ありかた・寺社のつながり・政治・人々の様子などが考察・解明されつつあります。本講座では、
鎌倉時代を中心とした多摩について、第一線でご研究の先生方にご解説いただきました。また
真慈悲寺跡の発掘調査が続く、京王百草園周辺の見学会を行いました。

□第1講	9月19日(金)	中世多摩地域の寺社―府中域を中心に―	20
		講師 峰岸純夫（東京都立大学名誉教授）	
□第2講	10月3日(金)	瓦からみる寺社のネットワーク	22
		―大國魂神社・二宮神社―	
		講師 深澤靖幸（府中市郷土の森博物館学芸員）	
□第3講	10月17日(金)	見学会 京王百草園周辺（真慈悲寺跡）	24
		講師 日野市郷土資料館・真慈悲寺調査ボランティア	
□第4講	10月31日(金)	普済寺版経などにみる中世多摩の領主・庶民・信仰	26
		講師 渋谷芳浩（あきる野市文化財保護審議会委員）	
□第5講	11月13日(木)	南関東の仏像と中世	28
		講師 塩澤寛樹（日本橋学館大学准教授）	
■		峰岸純夫「多摩の歴史講座の思い出」	30

定員 120名

場所 国分寺労政会館（第3講は見学会、京王百草園周辺）



あきる野市二宮神社出土の軒瓦
（『武州二宮神社と古代・中世の瓦』あきる野市教育委員会
より転載）

平成20年9月19日 午後1時30分～3時30分

第1講 中世多摩地域の寺社

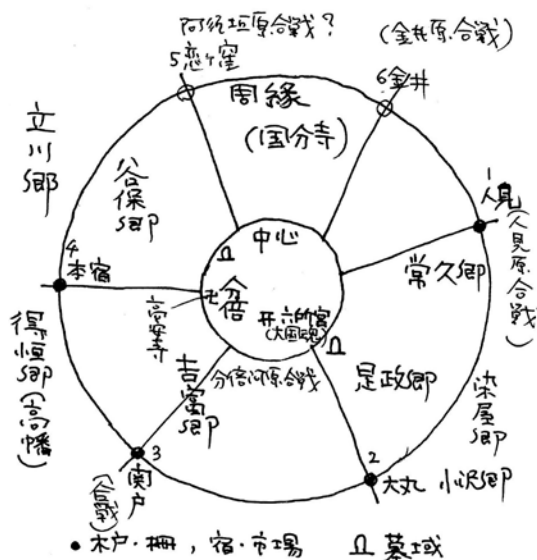
—府中域を中心に—

峰岸 純夫（東京都立大学名誉教授）

はじめに

府中域の中心と周縁の問題を考察し、その中における寺社の存在と役割を追求する。

一、府中域の領域とその防御施設、宿・寺社



府中域の領域、概念図

高安寺は南北朝・室町期に鎌倉公方出陣の際の御座所

六所宮（大國魂神社）を中心に、町場の分倍に立ち並ぶ施設（役所）と寺社、周縁に常久・是政・小沢・吉富・得恒・谷保・立川・（国分寺）の諸郷

1. 人見宿（五日市場）と木戸

人見宿（五日市場）に関する史料（正木

文書、次頁写真参照）

背後にある富士浅間山（社）、縁日は五日、幸福寺（天台宗、廃寺）、観音堂鰐口「多東郡府中人見観音堂」

人見原合戦（武蔵野合戦、正平7年（観応3年）・1352）

2. 大丸（小沢郷）多摩川の対岸

小沢郷（大丸・矢野口・長沼・菅など）

大丸城の発掘調査・経筒・板碑・古代瓦窯跡

円照寺と丸宮社（大麻止乃豆乃天神社）

3. 関戸（吉富郷の中心集落）、霞の関（異称）

南北の木戸跡、観音寺と熊野神社のセット。その内部が関戸宿、問屋あり

4. 本宿（西府地区発掘調査、南武線西府駅新設に伴う道路遺構に伴う区画溝と大型建物跡）

5. 恋ヶ窪

古代寺院恋ヶ窪堂跡、中世の宿、歌枕で有名だが具体的には不明

6. 金井

光明院（修験）と神明宮・付近で板碑出土

二、寺社の持つ意味

寺社とは寺・社ではなく一体化したもの。
神仏習合、本地垂迹説(仏が神の形に変わって出現、本地は仏)

- A. 寺—寺院の内・外に鎮守神を勧請
- B. 神社が先行し、その管理機構として別当寺を創設(鶴岡・宇佐八幡宮、石清水八幡宮)

鎌倉時代の高幡不動 木伐沢村に高幡不動(現・南平地区)と八幡宮

真慈悲寺(栢井、現百草山)は境内鎮守神として八幡宮を勧請。セットとなって存続、真慈悲寺は衰亡しても八幡社は残る。

三、調布深大寺僧長弁「私案抄*」に記載された寺社(永徳三年・1383、永享六年・1434)

武蔵深大寺・石原聖天坊(以上調布市)、

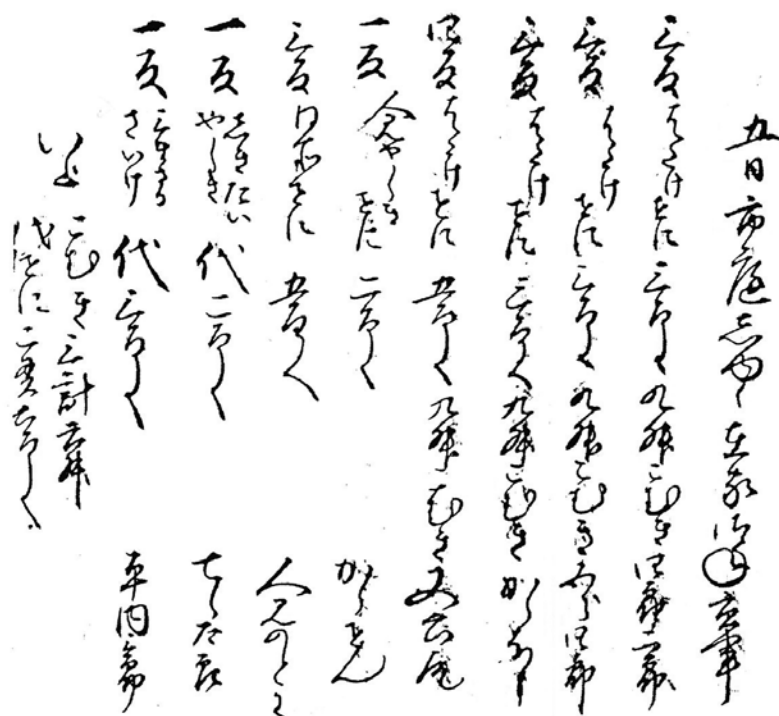
武蔵国分寺(国分寺市)、武蔵総社六所明神・武蔵府中勝宝寺(府中市)、武蔵二宮小川明神(あきる野市)、高幡金剛寺(日野市)、小山田保信光寺(町田市)、長尾山威光寺、稲毛庄栄興寺(川崎市)、若林石天神(世田谷区)、六郷保栄福寺(大田区)、川崎郷山王社(川崎市)

*神仏に捧げる諷誦文(祈祷文の案文集)

これらの寺社は神仏関係を考察する必要がある。寺院があれば必ずセットの神社あり。

四、墓域・府中三千人塚・長福寺・百草あさひ様(大石氏との関係を検討し直す必要)

むすび



人見宿(五日市場)に関する史料(正木文書)

平成20年10月3日 午後1時30分～3時30分

第2講 瓦からみる寺社のネットワーク

—大國魂神社・二宮神社—

深澤 靖幸（府中市郷土の森博物館学芸員）

1 多摩における中世瓦

瓦はどこにあるか

- ・府中市（大國魂神社・高安寺・国府八幡神社）
- ・日野市（百草園内）
- ・八王子市（梶原八幡神社・蓮生寺）
- ・立川市（普濟寺）
- ・昭島市（大日堂下遺跡）
- ・あきる野市（二宮神社）
- ・羽村市（阿蘇神社）
- ・青梅市（御嶽神社）

中世瓦研究の現状

近年、飛躍的に進展 奈良や鎌倉にある大寺社の瓦の調査研究＋各地での出土例の増加

従来は軒先瓦の紋様変遷 製作技法を含めた総合的研究

多摩では、資料集成、真慈悲寺（百草園内）で多量出土

2 二宮神社出土瓦

V群瓦 13世紀前葉～後葉（A期）

軒丸瓦—（軒平瓦）—（丸瓦）—（平瓦）

I群瓦 13世紀末—14世紀初頭（B1期）

軒丸瓦—軒平瓦—丸瓦—平瓦—熨斗瓦—鬼瓦

II群瓦 14世紀前葉（B2期）

軒丸瓦—軒平瓦—丸瓦—平瓦—（熨斗瓦）—鬼瓦

III群瓦・IV群瓦 15世紀前葉～中葉（C期）

III群 軒丸瓦—軒平瓦—（丸瓦）—平瓦—（挺斗瓦）

IV群 軒丸瓦—（丸瓦）—雁振瓦

年代の異なる瓦の出土は、それぞれの年代に瓦葺き建物の造営ないし修理が行われたことを意味する。近年、中世瓦の出土遺跡は増加しているが、複数時期の瓦が出土している例は僅か。二宮神社の中世における隆盛を偲ぶことができる。

二宮の領主

小川氏：中世前期 A～B期 武蔵国衙の在庁宮人出身、武蔵七党の一つ西党に連なる一族

大石氏：14世紀半頃～C期 関東管領山内上杉氏の宿老、武蔵国の守護代を歴任した一族

名族が二宮の地を領有したことが、度重なる瓦葺き建物の造営を可能にした。

3 大國魂神社出土瓦

量は少ないが、瓦当文様は多種。グループ分けと年代は不分明。

・12世紀：二巴紋軒丸瓦

・12世紀末～13世紀初頭：均整唐草紋軒平耳—丸瓦—平瓦（軒平耳は鎌倉・永福寺出土瓦と同箔）

- ・13世紀末～14世紀初頭：軒丸瓦—軒平瓦—丸瓦—平瓦—（熨斗瓦）
（軒平瓦は二宮神社に同範あり）
- ・14世紀前葉：軒平瓦（二宮神社に同範あり）
- ・15世紀前葉：均整唐草紋軒平瓦（高安寺、鎌倉・名越山王堂、建長寺に同紋・同箔あり）

4 比企の瓦・多摩の瓦

比企の瓦

埼玉県比企地方産 上向き剣頭紋軒平瓦で代表される瓦群

多摩川流域の比企地方産瓦

府中市大國魂神社、国府八幡神社、高安寺、あきる野市二宮神社、八王子市旧由木神社、昭島市拝島大日堂下遺跡、青梅市御嶽神社で出土。

胎土・焼成状況・分布の集中から比企地方産と考えてよい

同じ範で、作った瓦

- ・軒平瓦—大國魂神社
- ・軒丸瓦—足利・樺崎寺

多摩の瓦

下向き剣頭紋軒平瓦で代表される瓦群。多摩地方に特有の瓦群。府中市大國魂神社、あきる野市二宮神社、青梅市御嶽神社で出土。

分布の集中から、多摩地方産の可能性大。

同じ範で作った瓦

- ・軒平瓦—大國魂神社

5. 寺社造営ブーム

比企の瓦・多摩の瓦は13世紀末～14世紀前葉。この時期に寺社造営・造替が急増

二宮神社と領主である小川氏が、蒙古襲来や異国降伏祈禱と密接に関係

『吾妻鏡』正安3年（1301）8月

幕府は出現した琴星の放つ穢れから国土を護るため、「天下泰平御祈禱」を諸国の一宮・二宮及び国分寺以下の大寺社に命じる。

甕島（こしきしま）への襲来

文永・弘安の役の前後にも数回の侵攻があり。正安3年（1301）11月、小川氏の支族が地頭の薩摩国（鹿児島県）甕島に襲来。知らせを受けた幕府は、12月に異国降伏の祈禱を全国の寺社に命令。

6. 瓦から見た寺社間のネットワーク

寺社間のネットワークの存在

比企と多摩

六所宮・二宮神社・御嶽神社など多摩

六所宮・二宮神社・御嶽神社。特に六所宮と二宮神社は2度にわたる同時造営。六所宮は圏内の主要な6社を合わせ祀った社。国衙の在庁官人の系譜を引く小川氏が二宮を領有していた点が影響したと推定。

文献

二宮考古館資料整理委員会編『武州二宮神社と古代・中世の瓦』あきる野市教育委員会、2004年

深澤靖幸「武蔵府中高安寺の中世瓦」『府中市郷土の森博物館紀要』14、2001年

深澤靖幸「武蔵惣社六所宮の中世永福寺式瓦」『府中市郷土の森博物館紀要』20、2007年

中世瓦研究会東京大会実行委員会編『東京の中世瓦』2000

平成20年10月17日 午後1時～4時30分

第3講 見学会 京王百草園周辺（真慈悲寺跡）

日野市郷土資料館・真慈悲寺調査ボランティア

京王百草園前八幡下公園 ⇒近世期松連寺僧侶墓地 ⇒京王百草園 ⇒百草八幡神社
⇒真慈悲寺跡発掘現場 ⇒百草観音堂 ⇒真慈悲寺調査センター ⇒八幡下公園



近世期松連寺僧侶墓地



京王百草園



百草八幡神社



百草八幡神社



松連禪寺之碑



百草観音堂



真慈悲寺跡発掘現場



真慈悲寺跡発掘現場



真慈悲寺跡発掘現場



真慈悲寺調査センター

平成20年10月31日 午後1時30分～3時30分

第4講 普濟寺版経などにみる中世多摩の領主・庶民・信仰

渋江 芳浩（あきる野市文化財保護審議会委員）

第12回

1. 中世という時代

- ・京と鎌倉一二つの中心—
関東申次、街道の発達、関銭・津料、恩賞申請と訴訟
- ・承久の乱と西遷御家人
本領と西国の所領
小河氏の場合—薩摩甕島への庶子下向
立河氏の場合—仁和寺領丹後国上河品田地頭、立河馬允経成
- ・荘園と公領一年貢の行方—
鎌倉幕府滅亡と国衙の終焉、土地制度の再編、荘園の有名無実化
- ・東アジアの中の中世日本
発掘される中国磁器、銭遣い—銭はどこから来るか、新安沈船の積荷、中国との関係—南宋・元から明へ、元寇・倭寇

2. 中世日本の信仰と宗教と信仰

- ・対中国、人の交流
南宋の滅亡と禅僧の来朝、バイリンガルの寺院、密教と禅宗
- ・カミとホトケ
モンゴル戦争、戦う神、奮い立たせる仏、神仏習合
- ・民衆の信仰
15世紀の画期—板碑の変化、家族・村人、僧俗相半ば、墓がない

3. 「普濟寺版」にみる南北朝期多摩の信仰

武蔵国最古の刊経といわれた南北朝期のいわゆる普濟寺版五部大乘經典には、多くの助縁者の人名や在所名が刷り込まれている。これらの刻記を手がかりに当時の寺院や信仰のあり方、また多摩の村々の状況を推測することが出来る。

4. 現存「普濟寺版」經典の構成と伝来関係

- ・「大方廣佛華嚴經」60巻 貞治二年(1363)～応安七年(1374)刊
願主光信、祖栄
- ・「大方等日藏經」10巻 貞治五年(1366)～応安元年(1368)刊
願主光信、如見
- ・「大方等月藏經」10巻 応安元年(1368)～至徳四年(1387)刊
願主光信、如見、光由
- ・「摩訶般若波羅密多經」30巻 嘉慶二年(1388)～応永七年(1400)刊
願主光信ほか
- ・「大方等大集經」30巻 応安七年(1374)～至徳三年(1386)
願主光信

※行間に助縁者名が多数刻されていることが特徴。「華嚴經」「日藏經」「月藏經」を中心に総数は7000名以上におよぶ。

至徳三年（1386）刊「大集經」卷三十の刊記に「版留武州立川縣普濟禪寺」の墨筆あり。

↓

各卷末に永享五年（1433）三月廿三日上杉憲直による鶴岳八幡宮寺への墨書奉納識語あり。

↓

明治初年の神仏分離により外部へ流出、東洋文庫・大東急記念文庫・京都大学等に分散収蔵

参考文献

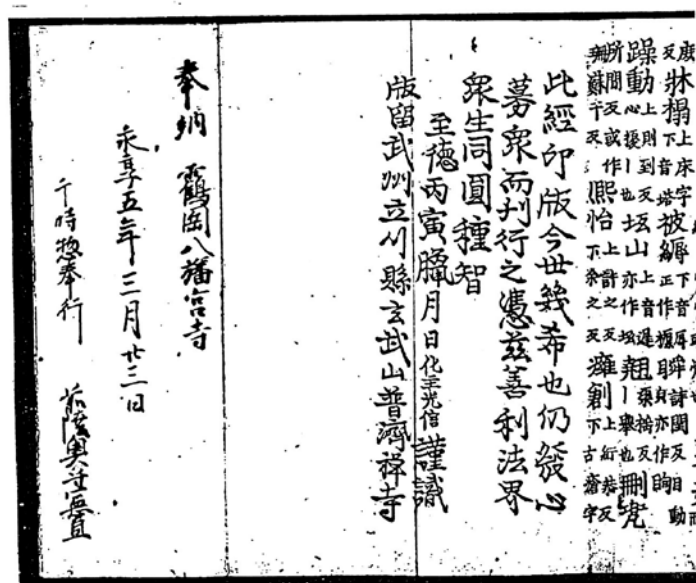
立川市「普濟寺版について」『立川市史』上巻 1968年

白石克「現存立川普濟寺版について」『書誌学』新第十八号 1970年

白石克「現存普濟寺版について（追録）」『書誌学』新第十九号 1970年

白石克「中世武州御岳山の勸進活動」『帝京史学』第18号 2003年

渋谷芳浩「『普濟寺版』刊經の刻記にみえる南北朝期多摩の地名と人々」『多摩のあゆみ』第118号 2005年



至徳三年三月廿三日
上杉憲直
奉納
普濟寺
版留武州立川縣普濟禪寺
此經印版今世幾希也仍發心
募衆而刊行之憑茲善刹法界
衆生同圓種智
至徳丙寅臘月日化光信謹識
版留武州立川縣普濟禪寺
永享五年三月廿三日
上杉憲直
奉納
普濟寺
版留武州立川縣普濟禪寺

普濟寺版經（普濟寺所蔵）

平成20年11月13日 午後1時30分～3時30分

第5講 南関東の仏像と中世

塩澤 寛樹（日本橋学館大学准教授）

はじめに

- ・地域…相模、武蔵を中心に
- ・時代…鎌倉時代前半を中心に

1、平安時代後期の状況

- (一) 定朝様の成立と普及
- (二) 南関東への普及

2、成朝、運慶と鎌倉幕府

(一) 勝長寿院と成朝・頼朝

- ①成朝について
頼助・康助・康朝のいわゆる奈良仏師の正系を継ぐ。
- ②勝長寿院とは
源頼朝が父義朝の菩提を弔うため、鎌倉に建てた。頼朝以下の幕府関係者が鎌倉に建立した最初の本格的寺院である。
- ③勝長寿院の造営（全て『吾妻鏡』による）

(二) 願成就院と運慶・北条時政

- ①願成就院とは
- ②願成就院と像の造立

(三) 浄楽寺と運慶・和田義盛

- ・和田義盛発願による文治五年（一一八

九）三月完成の阿弥陀三尊像、不動明王立像、毘沙門天立像が残る。

3、運慶様の伝統

(一) 建保・承久年間の運慶と鎌倉幕府

- ①実朝発願御所持仏堂本尊釈迦如来像
- ②北条義時発願大倉薬師堂本尊薬師如来像
- ③北条政子発願勝長寿院五仏堂五大尊

(二) 運慶様の継承と変容

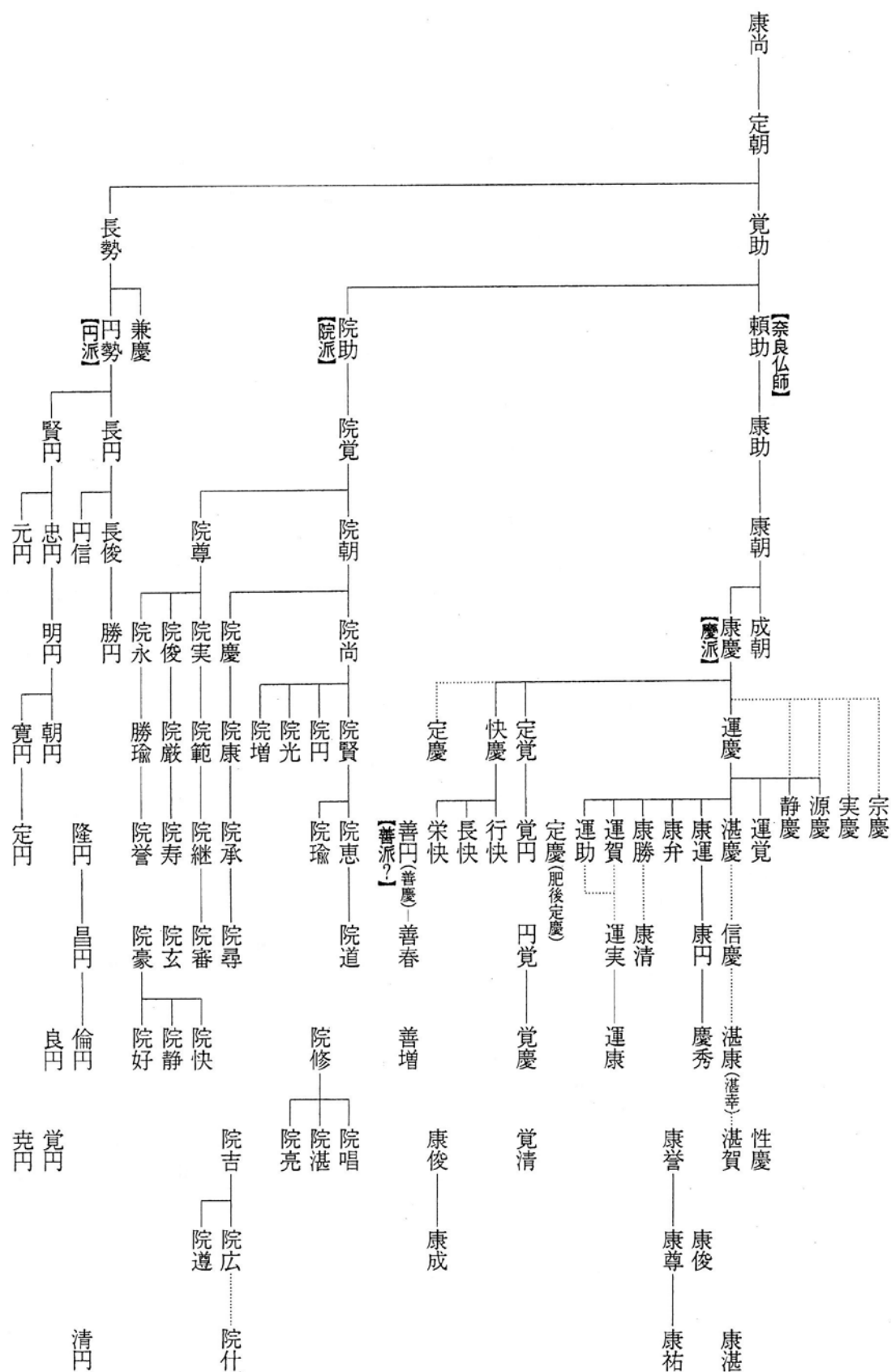
4、鎌倉大仏

(一) 鎌倉大仏の造形的特徴

- ・運慶様の伝統
- ・宋風

(二) 二つの大仏と鎌倉幕府

- ①東大寺大仏復興と頼朝
 - ・頼朝の奉加
 - ・『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条にみる御家人への割り当て
- ②鎌倉大仏
 - ・木造大仏
 - ・銅造大仏
 - ・鎌倉「新」大仏



主要仏師の系図（平安時代後期—南北朝時代）
 （水野敬三郎監修『カラー版 日本仏像史』美術出版社、2001年、200頁より）

多摩の歴史講座の思い出

峰岸純夫（東京都立大学名誉教授）

2008年9月19日に国分寺労政会館で「中世多摩地域に寺社一府中域を中心に」という講義をさせていただいた。その時の報告の一部に組み込んだ人見宿と五日市場の内容は私にとって忘れえないものでありました。これは新田岩松氏の「正本文書」のなかにあった次の史料に関するものです。

五日市庭しゅく在家御年貢事

三反	はたけ	せに三百文	九升こむき	四郎次郎
三反	はたけ	せに三百文	九升こむき	五郎四郎
三反	はたけ	せに三百文	九升こむき	かうはう
四反	はたけ	せに五百文	九升こむき	又六殿
一反	人見やしき	せに二百文		かうせん
三反	同所	せに二百文		人見のと殿
一反	しきたいやしき	代二百文		七郎太郎
一反	みまさかさいけ	代三百文		平内三郎
以上	こむき	三斗六升		
	代せに	二貫六百文		

この史料の五日市場宿がどこにあったものか、たまたま府中市域の小字地名地図を見ていたら府中の国府域の東に抜ける人見街道に人見宿があったのです。驚いてすぐに現地調査に行ったら、人見宿にはうっそうと木が生い茂った人見屋敷と称せられる旧家があり、北の山には富士浅間社や廃寺となった幸福寺跡があり、遺された観音堂には「多東郡人見観音堂」との銘文を持つ鰐口が存在していました。前述の史料は、この武蔵府中の東玄関口にあたる人見宿に含まれる五日市場についてそこに賦課される年貢（銭と小麦）の史料であったのです。そこには、この宿を管轄する人見屋敷があり、人見又六殿や人見能登殿の名がみられます。

現地を見て、夢はさらに拡がっていきました。この人見の起源は古代の「ひとび」（火飛）ではないか。古代の主要街道に一定の間隔で設置された烽火台（通信施設）がこの背後の山にあったのではないか。烽火（とぶひ）の高所は「飛火山」「飛火岡」「火飛山」などと呼ばれ、これが後に富山・富岡・人見山などの地名となって今日に伝わったと考えられます。烽火は、昼はもくもくと煙の出る樹木を焚き、夜は光り輝く樹木を焚き、順々に地域の危急を知らせる通信施設でした。奥羽や東海地方などから伝わる知らせは、ここを通じて武蔵国府に伝えられたのです。

当日はこの他、多摩地域の中世の霊場寺社や広大な墓域などについても触れましたが、その中で最も思い出に残ったのは、この正本文書の史料解説と現地調査の結果でした。